

その他

満州・シベリア抑留記

鳥取県 福島 稔

昭和十七年十二月十八日、徴用令により山口県光市
光海軍工廠勤務、昭和十八年、光市で徴兵検査を受け、
甲種合格を言い渡された。

昭和十九年二月二日、満州第二〇七部隊に現役兵と
して入隊するように現役兵證書が昭和十八年九月一日
付で来ていたので、一月中旬から帰宅を申し出ていた
が、わが国はマリアナ諸島まで攻め込まれている時、
一日でも長く、早く奉公せねばならない時でもあり、
ようやく、七日前に帰郷が許された。

入隊するための出発日時が鳥取県東伯郡由良町役場
から町長名で通知が届いていた。それには指定された
列車で出発、二月一日十七時までに宿舎に到着するこ
と。宿舎は広島市大手町五丁目の玉明館とあった。

役場の指定時刻列車で出発したが、宿舎に着いたの
は夜暗くなってからであった。満州から受領に来てい
た人事係曹長さんが「鳥取県の福島がまだ来ない」と
大変心配していたそうだ。近県の他の者はとっくに夕
食を終わっていたので自分一人薄暗い所で夕食をと
る。

昭和十九年二月二日、練兵場に行き人員の確認。そ
の夜、家から着て出た衣服を家に送り返すため小包に
した(軍服をもらって着替えをして)。三日夜帯剣、
水筒、背負袋が支給された。

二月四日、夜中に玉明館を出発。列車に乗車し五日朝博多港を出航。荒れ模様の天気小さい船で木の葉のようにゆさぶられ、戻すものが出る。自分も戻しそうになったが、がまんした。釜山に上陸して、飯の凍った弁当が支給された。まるで水をかんでいるようだった。

朝鮮縦断列車の窓が少し開いていて、閉めようとしても凍りついていて閉まらない。がまんしていたが風邪を引いてしまったようだ。だが気力で我慢をしてみた。

二月十四日、満州第二〇七部隊分屯隊で入隊式を行った。隊長・後藤良圀中尉、牡丹江省東寧で国境警備と共に新兵教育をする。一〇センチ野戦重砲、加農砲の最大射程は一三二〇〇メートル。

入隊式後、自動車班と砲手班にそれぞれ自分の希望する方に分かれた。自分は自動車に乗って逃げ回るより、火砲と共に運命をかけるため砲手班を希望した。ある夜風邪気味だったため、四二度の高熱を出した。不寝番もビックリし、衛生兵が下士官を呼んで来る。

カンフル注射をして病院に行く。クループ性肺炎で東寧第一陸軍病院に入院し、三月二十三日退院した。

このように、初年兵入隊早々の入院で、退院しても転属要員となったため野戦重砲兵第十七連隊に転属、独立臼砲第二十三大隊に転属した。

この隊は兵器で、教育中も筆記は許されず、総て頭の中がノートだった。最大射程一、二〇〇メートルで、場合によっては自分の所に破片が返って来る。砲身の外に爆弾をのせたようなもので、四枚の羽根が弾尾についている。

一発が三ツに分解出来てロープでしばり、差合棒で三分の一づつを二人で肩でかつぎ、一発の弾を六人で運ぶ。砲身を据えるにも、台湾檜の一尺角材で下が六尺、中五尺、上四尺位の四角の三段重ねで、これに砲身を取り付けるが、四五度の傾斜の穴を掘ってのことではなかなか大変である。早く掘るためツルハシを五、六回打ち込むと交代する。実弾を打ち上げると弾がふわふわと飛んで行くのが肉眼で見えるので皆が凧上げと言っていた。

着弾点には相撲の土俵より大きい丸い穴があき深さ四、五メートル位はあった。

打ち上げの時は皆が壕の中に入って見ている。沖縄で米軍が上陸して来る時に使用して戦果をあげていると聞かされていた。何時頃であったか、近くの各部隊から分遣隊として一個中隊位が明月溝の山の中に陣地道路造りとして入った。

合掌作りの小屋掛けで、満人も別小屋で作業に使用していたが、自分がヤイト（お灸）をすえてもらったり、人にもすえてやったりしていると衛生下士官から呼ばれた。何かと思いい行つて見ると、満人が横着休みするのでヤイトをすえてやってくれとのことだ。手持ちのヤイトは残り少なく新たに作らねば出来ないことを話すと、作業に出なくてよいからヤイトスエを作つてやってくれと言われた。

その日からヨモギを採取して乾燥させ、円匙（スコップ）を火の上のせて焼き、その上にヨモギをのせてもむ。何回となくもみほぐして作るのを柳瀬隊長の目の前で実演をして作る。本来ならばスコップを火に

かけて焼いたりすれば叱られるはずである。

充分の量が出来て満人の所に下士官と共に行き、背中に大きいヤイトをすえてやる。次の日にはこりたのか、その満人さんは作業に出たらしい。他の満人は足が悪いというのでスネの下の三里という所にすえてやる。この人は本当に悪かったらしく喜んでいた。自分の方がもう良いと言つて行かねば迎えに来る始末。年輩から若者の十七歳の者もいて残飯があれば食べさせてやると毎日来るようになった。

言葉は余り通じないが次第に意味が分かるようになり親しくなつて来た。自分は福島と字を書いて見せる、「フクトウ」と読む。シマをどうしてもトウと読む。ある日、鶏の卵を五、六個持つて来てくれた。可愛がつてやればなついて来る。こうしてやれば仕事も元氣出してくれると思つた。

ある夜、異状な光と音がした。大分遠い所のように見えたがこれはただならぬことと直感した。夜明けになると、ソ連軍が入つて来たことが分かった。隊長の柳瀬少尉は年配だったので、原隊復帰と言うことにな

り、部隊に帰る途中の汽車はこれが最終便とのことで、これには民間の人も逃れるために大混雑である。

その後どうしたのか忘れて分からないが、図們の工兵隊の兵舎だと言う所に来ていた。工兵隊の人達は出払っていなく、兵舎の中は大分ちらかっていた。見ると一装用軍服があるので、近くにいた者呼んで新品の服と着替える。大廻し箱の中には小箱マッチが沢山入っているのを見つけ、皆に持てる限り持つように投げ出してやる。炊事するにもマッチが一番大事だからと、この時は階級なんか頓着なしだった。上等兵もいれば兵長もいる。自分はただの一等兵だが、服が新しいので余りにも目立つたため、皆で草の汁をつけたり、土をこすり付けたりして、人目を少しでもさけるようにした。何しろ三装でポロ服を着ていたのので後のためにはよかった。

その日は兵舎の中に寝た。朝、民間の人が残して行った兎を料理して平釜で飯をたき、さあ食べようといった時、近くから大砲を打つような音がする。味方の砲兵が来てくれたといっていると弾が自分等がいる方

に飛んでくる。ソ連の戦車砲だった。退却命令が出て一たん引き下がる。飯はそのまま敵に背を向けて走る時のせつなさ。同年兵の高知出身の田村満がバケツで釜の飯をすくって一番後から走って来る。自分は兵舎の中にあつた大きいキウリを五、六本かかえて走る。今射たれるか、今かと気にしながら走つたが運良く田村も生きて追いついて来た。九死に一生を得たと思つた。

その日か、翌日だったか覚えていないが、正面切つて戦闘が始まった。夏の暑い日で、上衣と雑囊は脱ぎ置き、水筒と帯剣、小銃だけになり、少しでも身軽になつて、ソ連軍を攻めたがこちらも戦死、負傷者が出た。同年兵で北海道出身で橋本稔、自分と同じ字の名の「稔」で二人がチェッコ機銃を分捕り、余分の物を二人で持ち歩いたが、敵は何千とも見える数で攻めて来るのを見て、隊長は退却を命じた。小銃の弾は一五発づつしかもらつていない、貴重な弾であるからやたらに使えない。自分の一メートルぐらい左に伏せていた人も、鉄帽直角に弾が当たつたのか貫通して即死し

た。

自分もここで死ぬのかと思つたが、恐れはなかつた。特に自分は、昭和十六年五月二十二日宮城前広場で昭和天皇の御親閲を受け、国の爲に死する覚悟でいたからだ。退却をしてから他の部隊の将校が来て終戦になつたから戦闘は止めるようにと知らされたが、ソ連軍が撃つて来るので、敵がやるなら、やつてやれと勇み立つ。

夜のこと、どこの部隊か将校が手榴弾を五個ぐらい紐でからみ付け、戦車攻撃をするのに、人間と共に戦車の下になり爆破すること、もう何人もの人が散っている。その後何日位たつたのか、囚人の橋の上まで来て武装解除。

さあ、これからどうなるのか、見当もつかない。毎日、ぞくぞくと部隊が集結して来る。千人単位で大隊を作り、自分等の大隊は第二十八大隊とのことだつた。ソ連兵の話では「ウラジオから日本に帰る」との話であつた。

大部分の人は信じていた。何日か経って、いよいよ

部隊が動き出した。明月溝の山で同居していた者は同じ部隊になつた。民間の家に残されていたニューム製のハガマを分隊として持つて来ていたので、あてもない行軍の途中休息になると馬鈴薯の畑を見つけると我先にと取りに行く。薪も貴重品でなかなか見付からない。割箸位の木切れでも奪い合いになる。皆の背には木片がしばり付けてある。その時このような様子を映画にでもしておいたらと思つたことをはっきりと覚えていた。題名は「薪の行軍」とでも言つてよい位だつた。

我々の前に何個大隊この道を通つたのだろうか、荒らされている畑もある。先に通つた者が得をしている。我等より後から来る者は気の毒なことだ。食べられそうな物、薪にする木切れはどこにも見付からない。旧満州国内なのか、ソ連領に入っているのかも知ることも出来ないで、ただ毎日が行軍の日々であつた。

所々にソ連兵の監視がついて歩いている。中に若い兵が本を読みながら歩いているのがあつた。将来出世するための兵法の勉強なのか、小説とは思えないよう

な本であった。どちらにせよ若い兵が任務につきながら勉強する姿には感心した。行軍中は夜は野宿である。幸いまだ暖かい時期でよかった、監視兵は「東京ダモイ、ダモイ」と歩け歩けを連発するのである。

ある夕方、食糧に高粱が支給されるので「使役に出ろ」と言つて来た。分隊総出で使役に出て、日暮れになつて一吠横取りしようと言がきまり、大きい草のある所にころがし込んで、知らん顔して次々と運ぶ。最後になつて受取の方から一吠足りないと言つて来た。調べられたが手許には無い、草の中に隠してある。とうとう見付からずに終わり、朝までに使役に出た者全員で分配してしまつた。

高粱は魔物である。一度炊いて食べた後、残りにまた水を入れて炊くと、また飯盒一杯になる。食べてまた水をいれて炊く、四、五回は食べた。当分の食糧は大丈夫だった、マッチも皆が持っているので安心だった、何より良かったのは新品の服に着替へしたことがつた。

九月に入つてどれ位過ぎたのか、気候はもう冷える

よになつていた。何時頃であつたか「毎日の行軍で疲れただろう、ウラジオまで汽車に乗せてやる」と貨車に詰め込まれた。横向きになつて寝てやつと入れる位に詰め込まれた。一旦小便にでも起きたら元の所には入れない。しかたがない、両側の人の上に寝ると自然にずりこんで行くので自分の寝場所が出る。

ソ連領に入つている証拠に駅に停車することに、ソ連の民間人がタバコを持って、毛布や時計と交換に来る。そのタバコたるやタバコの莖を刻んだもので、材木の鋸屑の荒いようなバラの袋入りで、新聞紙を適当に切つてタバコをのせて丸めてツバで紙をぬらし、くつつける。ツバが糊の代わりになりマホルカと言う、一番下等品である。その上になると葉の部分が少しまじる。正式の巻タバコは上流階級の者が吸つている。悪質なやつは材木の鋸屑をタバコの袋に入れて交換に来る。毛布を引つたくりして逃げるやつもいた。ある駅では通行証を忘れて次の汽車に持つて来てもらうため、二日位停車したこともある。

貨車の中にソ連の字が読める者がいたのか、ウラジ

オを通過してしまつたと話が広がつて来た。皆が不安な気持ちになり出した。外の景色も山奥らしくなつて来て、やっぱりだまされたのだと気付く。「ウソつきとドロボウ国」であることを立証した。

汽車から降りて、どれ位歩いたか、ソ連の囚人達が入つていた所に我々が入つていった。出て行くのとは違ひだったが日も暮れかけていた。その場所の名は「コムソモリスク」とかで、もう雪が降つていて水気の所は凍つている。誰が覚えていたのか今日は十月二十八日と言つていた。

収容所に入つて第一夜である。家の中は、さっきまで人が入つていたので暖かくなつていたので助かったが、異様な臭いがしていた。でも寒いよりはましで各自思い思いの所に場所を取つて夜を明かすが、大変なのは水くみである。井戸は相当深いらしくツルベの縄も大分長い。井戸のまわりは水がこぼれて氷になつていて、すべて井戸の中にも落ちたら、さらばである。井戸の縁に囲いが無いからだ。

当分は作業も無く、行軍と貨車詰めの休養になった。

さて、作業が始まるとそれは伐採であつた。大木を二人がかりで切り倒す。一メートルそれ以上もある鋸で、雪の上に腰を下ろして両方から引き合つて切る。倒れる前にはよほど気をつけて逃げる準備をしないと、木が倒れる時にはね飛ばされたり、下敷きになつたり危険である。雪があるので思うように動けないから、近くの雪は踏み締めてから切りにかかる。

倒れた木は一三メートルに切る。切つた木は別の者が馬に引かせて運び出す。雪がある間に運び出さないと滑りが悪くなるので早く出してしまふ。何しろ人間の食糧が不足しているので馬の食糧である燕麦や岩塩を人間様が横取りしてしまふ。馬は腹をすかせながら大きい木材を引き出す。荷を引くまでは白樺のまだ堅い芽を食つている、誠にあわれだった。

弱肉強食と言う言葉をまざまざと見せつけられた。朝まだ暗い内に食糧の馬鈴薯など馬車で炊事場の方に運んで行く。たまたま馬鈴薯がこぼれ落ちてゐる。それをねらつて拾いに出る。暗い所なので馬鈴薯か馬糞か見分けがつかず持ち帰つてベチカの中に投げ入れて

各人が自分の物を監視する。ある者は本物であり、ある者は馬糞であつたりするなど滑稽なともいえない様相が繰り返される。

何しろ、一日黒パン三〇〇グラムとスープ少々。具は運が良ければホーレン草の葉が一枚入っていれば上の上である。何も入っていない時もある。何時頃からか、主食が大豆のやわらかく煮たものに変つた。実は半分位あとは汁である。柄杓で一食分の量を各人の飯盒に入れてくれる。当番制にして五、六人組で交代で受領に行く、時には豆の量が多かつたり少なかつたりすることがあつた。食べる時はゆっくりと豆の数を数えながら食べたこともある。大豆ばかり三ヵ月位も食べ続けたこともあつた。

作業に出ている下痢で大豆の丸粒を出している者があれば、それをリスが食べに来る。両手で口を持って行く様子を見ていると、何とも可愛く無心の安らぎとなり、捕虜の身の上などすっかり忘れてしまふ。

雪が解けて五月末頃にもなると、野草を飯盒で炊いて食べた。それも台湾出身の軍医さんが自分で試食し

て見て毒気のない草は我等に食べて良いと通知を出してくれたから安心して食べた。時には軍医さんが何を試食したのか中毒を起こして一ヵ月以上も休んだことがあり、この軍医さんには感謝した。

その頃であつたか、茸が生えている所に出合つた自分の所ではドベ茸と言って笠の上の色が丁度栗の皮の色でぬるぬるしている。この茸を一日に飯盒で一杯以上も食べた日もあつた。

転々と収容所を移され、移動の度に作業内容も変わる。寒い冬の日でも建築大工をさせられた。今は内地でも各地で丸材の積み上げた小屋を見かけるがあの様に積み上げた大型の家屋である。寒い時期には木材に墨を打つても墨糸が凍つて墨が付かない。焚火をした炭を糸にすり付けて何とか見える位のスジがつく、積み上げの時ホゾでつなぎをする。丸い物同志で多少は隙間が出来る、そこには苔を差し込んで行く、後で差し込んだ時もある。

四隅の端がそろっていないので垂直に切り落とすのだが斜めになると監督が大声で叱る。こっちは馬の耳

に念仏である。

ある収容所はレンガ焼の所だった。ここが一番重労働だと思った。一窯に十万個焼けるとの話だった。大きな羊羹のような練った土が上から型の中を通って出てくる。それをレンガ四個分に切断して、切った生のレンガは乾燥場に運ぶのだが、トロッコに乗せる時、指のあとを付けないように手のヒラで取ってトロッコの台に乗せる。だが指の跡がつくと監督がキャンキャン怒る。逃げるときわざと指の跡を付けてやる。寸分の休む暇が無い。上の土練りが休まない限り休めない。交代も無い。ほんとに生き地獄である。

幸いにして短い間で他の収容所に変わったが、どこへ行っても、いる所の名前は知らない。最初の「コムソモリスク」だけは聞いていた。何と言う所か分からないが、山奥につれて行かれる時薪を炊く汽車に乗った。上がり坂に向かった時火力が足りなかったのか、後戻りを始めてビックリした。

着いた収容所は新設の鉄道敷地のようだった。長い貨車に満杯の砂利が入って来る。降ろす作業もなかなか

か重労働である。土ならスコップも突きささるが砂利はすくい込むのがむずかしい。日中の作業でくたくたになり体力も弱っているのに、夜中に貨車が入ってくれば起こされる。大きな貨車一杯に砂利が入っているのを「早く早く」とせき立てられながら砂利降ろしをさせられる。腰を伸ばす間もない。余分の重労働で、朝はまた日中の作業に出される。

ひどい使い方をする。こんなことでは死を待つばかりとなる。そこで病院に入ることを思いついた。わざと風邪を引く、体温が三七度以上ないと休ませない。体温計を何とかごまかして医務室に入る。栄養失調で入っている者が大分いるようだった。何日か医務室にいたる内に、本当に病人になって、重病でないので心配なかったが本当の病院に入った。一ヵ月位は休んだ。退院して伐採した木の枝焼きに出された。枝を集めて大きな山にして火をつける。近くの草まで焼けて広がる。それを消すため松枝でたいて消している内に火の中に囲まれてしまった。逃げ出さねば焼け死んでしまう。必死でやっと火の外に出た。五、六人いたの

でそれが出来た。命拾いをした。

ある日の夜「服の修理が出来る者はいないか、靴の修理が出来る者はいないか」と聞かれたので、少しでも楽な方に行つてやろうと思つて手をあげた。一日にどれ位の修理が出来るか聞かれ、程度によりますと答えて服の修理をすることになった。靴の修理もきまつた。あと一人洗濯する者がきまり、三人でソ連の囚人収容所にソ連将校につれられて仕事に行く。同じテールブルに向い合つての修理、靴の方も隣で囚人と同居で仕事をする。洗濯は別の建物だった、始めは手真似で話をする次第に意味が分かるようになる。

「スコリコレート パルトノイ」と言う。「何年洋服屋をしているか」と聞く。当時二十四歳であるが、三十年洋服屋をしていたと言うと、相手も大体の年頃は見当がつくから笑う。互いに打ち解けて来て何でも話すようになる。まわりを気にしながら「スターリン、ニーハラショウ」と言う「スターリンはいけない」との悪口である。

囚人達は修理代を品物で支払っていた。鮭を持って

来る者、砂糖を持って来る者いろいろだった。自分にも鮭を片身ぐらくれる。それを飯盒で炊いて食べる。時には砂糖もくれる人間同志という感じだった。この仕事も一ヵ月位で終わりになった。

ソ連の将校が「ヤボンスキー、キノイエス」と聞くので「ニーブニマイ」と答えて手真似で話すと、日本に映画があるかと言うことでビックリした。「イエス、イエス」と答えると笑っていた。まだ書けば長くなるのでこれ位で打切りにするが、ナホトカの港に出て来る時は病院から出てきた身ではあつたが元氣そのものだった。浜で二列に並び、日本の軍医さんが何で入院していたかを聞いて、それによつて二組に分けた。自分はウソを言つて「肋膜炎で入院」と言つた。自分の反対側の組はまた近くの所で作業させられるそうだった。

三日位して日の丸を立てた船に乗り込んだ。「信洋丸」で貨物船だった。昭和二十二年十月十五日出港、舞鶴に十月十八日上陸して、家に帰つたのは十月二十二日午後だった。

【解説】

執筆者・福島稔氏が満州で一時転属した独立臼砲第二十三大隊は昭和十九年十月十一日満州稜後で編成し、同二十年四月、図們通過後、朝鮮半島を南下し斉州島で勤務とある。文中にある臼砲は恐らく特殊な大口径（九八式臼砲・四式噴進砲）のものであつたらう。ここでは昭和二十年八月ソ連侵攻、停戦後シベリアへ強制抑留された、軍人軍属等の移送状況につき厚生省資料を簡単に記することとした。

編成地点の下の括弧内に①大隊数②人員千人③主要入ソ地区④経由地点。を記載。

〔東部満州〕

- 拉古 ①二六 ②二五 ③ウオロシフ、スーチヤン、アルチョム、イマン ④綏芬河)
- 海林 ①五三 ②五一 ③イズベストコーワヤ、タイセット、ホルモリン、ライチハ、イルクーツク ④綏芬河、満州里)
- 敦化 ①二六 ②二五 ③タイセット、ホルモリン、バウナウル、ロストフカ ④綏芬河、

満州里)

- 東京城 ①一四 ②一四 ③コムソモリスク、ハバロフスク、ホール、ピロビジャン ④綏芬河)
- 蘭崗 ①一五 ②一五 ③タイセット、ホール、ピロビジャン ④綏芬河)
- 金著 ①一四 ②一四 ③ムリー、コムソモリスク、ホルモリン ④琿春)
- 延吉 ①四二 ②四〇 ③ムリー、コムソモリスク、ホルモリン、ハバロフスク、ホール、モスクワ ④琿春)
- 佳木斯 ①一六 ②一六 ③ハバロフスク、ピロビジャン、イズベストコーワヤ ④松花江)
- 牡丹江 ①八 ②五 ③スーチヤン、ウオロシロフ、ウラル、モスクワ ④綏芬河)
- 掖河 ①六 ②五 ③タシケント、ウラル ④綏芬河)
- 合計 二二〇大隊、二一〇千人
- この他に、技術、衛生、輸送関係者で作業大隊に編入されず入ソした者が約二、五〇〇名あり。

〔北部滿州〕

孫 吳 ①二六 ②二六 ③ライチハ、ブラゴエシ

チェンスク、ニコライエフスク、ハバロフ

スク、ホール、ルフローボ ④黒河)

北 安 ①六 ②六 ③イズベストコーワヤ、ウヤ

ツカ、モスクワ ④黒河)

綏 化 ①三 ②三 ③ウヤツカ、クラスノヤルス

ク、アバカン ④黒河)

哈爾濱 ①一 ②一 ③ピロビジャン ④滿州里)

嫩 江 ①四 ②四 ③ブラゴエシエンスク、ルフ

ローボ ④黒河)

齊々哈爾 ①二二 ②二六 ③スレテンク、タイセ

ット、チタ、クラスノヤルスク、カダラ、

アバカン、ウランウデ、アルマアタ ④滿

州里)

博克図 ①六 ②六 ③チタ、カダラ、クラスノヤ

ルスク、アバカン ④滿州里)

海拉爾 ①二 ②二 ③クラスノヤルスク、アンゼ

ルカ ④滿州里)

合計 七〇大隊 七四千人

このほか、外交、情報関係者等で作業大隊に編入されないで入ソした者が約一、二〇〇名ある。

〔中部南部滿州〕

吉 林 ①一五 ②二二 ③ウオロンロフ、ブラゴ

エシチエンスク、カダラ、アルタイスカヤ、

バルナウル ④黒河、滿州里、琿春)

新 京 ①二〇 ②二三 ③スレテンスク、プカチ

ヤチヤ、カダラ、モスクワ ④黒河、滿州

里)

公主嶺 ①一五 ②二二 ③イルクーツク、チエレ

ンホーボ、ウランバートル ④黒河)

四 平 ①一五 ②二二 ③ウランウデ、イルクー

ツク、ウスチカメノゴルスク、カラカランダ

④黒河)

奉 天 ①四四 ②四五 ③カラカランダ、チタ、ウ

ランウデ、ガラドツク、イルクーツク、チ

エシンホーボ、タシケント ④滿州里)

鞍 山 ①四 ②三 ③コーカンド、アングレン、

タシケント、クラスノボドスク ④満州里

海域 ①一五 ②一五 ③チタ、カダラ、クラス

ノヤルスク、モスクワ、ウランバートル

④黒河、満州

錦州 ①一六 ②一六 ③アンゼルカ、ケーメルボ、

ベグワード、モスクワ、ウランバートル

④黒河

合計一四〇大隊 一五二千人

このほか、情報、憲兵、技術、衛生関係者で作業大隊に編入されないで入ソした者が約二、〇〇〇名ある。

〔北朝鮮〕

三合里 ①一四 ②二三 ③ソフガワニ、テチュエー

ハ、ポセツト、スーチヤン、ウラジオ、ア

ルチョム、ウオロシロフ、ロストフカ、モ

スクワ ④興南

秋 乙 ①九 ②九 ③ウラジオ、アルマアタ、ク

ズオルダ、コーカサス ④興南、クラスキ

一

美勒洞 ①一二 ②一二 ③カザン、モスクワ ④興南

古茂山・富寧 ①七 ②七 ③ウラジオ、セミヨノ

フカ、ウオロシロフ、レニナゴルスク、ウ

スチカメノゴルスク、ウクライナ ④興南、

クラスキー

宣徳 ①三 ②三 ③ナホトカ、スーチヤン ④

興南

富坪 ①一六 ②一六 ③スノチヤン、セミヨノフカ、

イマン ④興南

五老里 ①二 ②二 ③セミヨノフカ、イマン ④

興南

興南 ①二五 ②二四 ③ソフガワニ、テチュエー

ハ、スーチヤン、ウラジオ、アルチョム、

セミヨノフカ、ウオロシロフ、アンジシャ

ン、ベグワード、ウクライナ ④興南、ク

ラスキー

合計 六八大隊 六六千人

このほか、外交関係者で作業大隊に編入されないで入ソした者が約三〇名ある。

〔樺太、千島〕

豊原 (①五 ②五 ③ニコライエフスク、ナホトカ、セミヨノフカ、イマン、ムリー ④大泊)

大泊 (①九 ②七・五 ③北樺太、ナホトカ、ムリー、モスクワ ④半田、大泊)

上敷香 (①一 ②一 ③セミヨノフカ ④大泊)

幌筵 (①一〇 ②八・五 ③ニコライエフスク、

ナホトカ、ウラジオ、ムリー ④大泊)

占守 (①一六 ②一四 ③カムチャッカ、ウオロ

シロフ、マガダン、ネムリー、スーチヤン、

アルチョム ④占守、大泊)

松輪 (①三 ②二・八 ③ムリー ④大泊)

得撫 (①六 ②五 ③ムリー ④大泊)

色丹 (①八 ②六 ③ムリー ④大泊)

択捉 (①一三 ②二一 ③ムリー、ウラジオ ④

大泊)

合計 七一大隊 六〇・八千名

このほか憲兵・警察・技術・衛生関係者等で作業大隊に編入されないで、カムチャッカ半島(一部ハバロ

フスク)に送られた者が約五〇〇名、受刑後本土へ移送された者等で作業大隊とは別個に入ソした者が約六、〇〇〇名ある。

気象隊という部隊

愛知県 森 由 治

(はじめに)

私の所属した部隊は気象隊という特殊な部隊であり、沖繩・ニューギニア・フィリピン・ビルマ等で数多くの戦死者を出しているが、歩兵部隊のような地上戦闘による、直接犠牲者を目前にしての労苦ではない。気象隊は後方勤務と見られ、直接戦闘にはタッチしないのが建前だからである。しかし、多くの人々にはほとんど知られていない気象隊の実態を書き残すことも、必要なことではなからうかと考える。

一、豊川海軍工廠と職業安定所

家が貧しく子だくさんのため伯父の家で育てられ、